

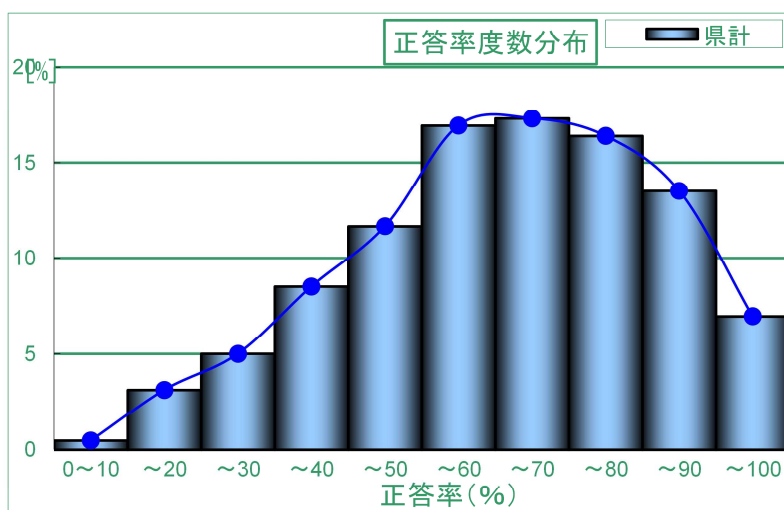
平成29年度 大分県学力定着状況調査結果(中学校:英語)

1 結果のポイント

全問題数：35問（知識 25問、活用 10問）

		知識	活用	内容	正答率	目標値
				リスニング(内容理解)	81.8	79.2
				リスニング(対話文の応答)	57.2	56.3
				語形・語法の知識・理解	63.0	60.0
H29		50.0	49.8	語彙の知識・理解	68.7	66.3
H28		49.9	50.2	さまざまな英文の読み取り	59.7	58.8
				長文の読み取り	34.1	42.5
				単語の並べかえによる英作文	59.8	62.5
				場面に応じて書く英作文	34.4	40.0
				3文以上の英作文	77.3	65.0

- ・「書くこと」の領域は、正答率は62.7で、目標値60.8を上回っているが、「単語の並べかえによる英作文」と「場面に応じて書く英作文」に課題があり、無解答率が30%を超えている問題もある。
- ・「聞くこと」「読むこと」の領域の偏差値はそれぞれ、49.9と49.8。「長文の読み取り」に課題がある。



2 課題が見られた問題と指導の改善事項（領域別）

(1) 「聞くこと」

- ◆文の中に不慣れな単語や表現が含まれている場合は、全体の意味の把握に困難が生じると言える。
- ◆語句単位で断片的な理解はできているが、文全体及び文脈で意味を把握することに課題がある。



◎絵やイラストの内容に合った英文を選ぶ問題

- *指導の際、話がされている場面や状況を生徒が理解しているかどうか確認する。
- *教科書などのイラストなどを見て、「何をしているところか説明してみよう」などと投げかけ、英語で表現してみる活動や、聞いたことを整理してまとめて、ペアで話し合うなどの活動をする。

◎対話文の最後の応答部分にはいる適切な英文を素早く判断する問題

- *指導の際に、「こう聞かれた場合は、こう答える」といった「型」ではなく、様々なやり取りを提示して、答え方にはいろいろあることを学ばせることが重要である。ペア・ワークなどを行い、示された例文だけでなくよいことも伝えてやり取りし、代表のペアがクラスで発表するなどの機会をもつよい。
- *例えば、“Do you have a pen?”と聞かれたときに、“Yes, I do.”ということではなく、“Here you are.”のように返すなど、「相手がなぜそれを聞いているのか」、「相手の意向が何であるか」を類推する活動も効果的である。

◎日本語で事前に与えられる状況設定や表などの情報と放送される英文から、その場で求められているタスク（課題）を解決する力を測定する問題。

- *例えば、店で買い物をしている場面などのイラストを見せて、今何をしているところか描写する活動をしてみるとよい。その際に、状況だけでなく、そこに登場している人物に吹き出しなどをおいて、「その人は何を言おうとしているか」など、文脈の中で求められるタスクを考えて表現させる活動なども効果的。

(2) 「読むこと」

- ◆英文全体の意味を把握し、文脈や前後関係を押さえながら読むことに課題がある。
- ◆話の流れや複数の情報相互の論理関係を理解する力に課題がある。



◎与えられた英文の題材から、短時間で必要な情報を引き出す問題

- *インターネット等・新聞記事・広告・時刻表など生徒にとってふれる機会のある身近な題材を用意して、10分くらいの時間で「楽しく読む」ことの活動として取り組む。

*素材を読むときに、1文1文丁寧に読むのではなく、さっと目を通し、その理解の確認として、「何の目的で書かれたものか」「何を伝えているか」などを中心としたやり取りを、教師と生徒の間で行うとよい。

◎与えられた英文の題材について、短時間で概要や要点を読み取る力を測定する問題

*まとまりのある英文を読むときに、いきなりまとまった長さで取り組むのではなく、パラグラフごとに「今登場していた人物は誰か」「何か読み解けたキーワードはあるか」など1つ1つスモールステップで確認しながら読み進めていくことが重要。その上で、クラス全体で、この素材は何をテーマにしていたか、など質疑をしたり、ペアで伝え合ったりする活動を取り入れると効果的である。

*やり取りしたことや読み取った内容を英語にまとめて書いてみるなどの活動を行うことも重要である。

(3)「書くこと」

◆英文を正しい語順で書くことができない。(現在進行形の疑問文、否定の命令文)

◆対話の流れに合った英文を、適切な表現を用いて書くことができない。



◎対話文中の空所に当てはまる応答を前後の文脈から判断し、適切な英語を用いて表現する力を測定する問題

*内容に合う文を書く力をつけるためには、対話文のあとにもう一文加える活動が考えられる。

例：Did you watch the soccer game yesterday?

-Yes, I did. ()

空欄に、具体例や理由を付け加える。

*中学1年生の教科書素材文など、これまでに習った対話文の一部を空欄にし、そこに内容を考える活動が効果的である。その際、書く活動だけでなく、口頭で答えるなど、話す活動を通して英文の意味を理解しながら書くことの活動を行うとよい。

◎与えられたテーマに対して、限られた時間の中で自分の意見や考えを書いて表現する力を測定する問題

*伝えたい内容に必要な語彙のインプットを増やすために、生徒が話す活動後に会話をした内容を書くなどの活動も効果的である。

*アイデアの膨らませ方は、教科書のモデルを見せるだけでなく、表現の仕方を教師が実践して示す必要がある。その際、生徒の伝えたい内容を、簡単な語句や短い文章で流れを示すことが重要である。

*段階的に書く量を増やしていく必要がある。例：アンケートのフォーマットに書く活動として、あらかじめ“Name”, “Dream”, “Reason”の枠を作っておき、書くべき内容を意識しながら短い文を書く練習をする。

3 指導改善のポイント（全体を通して）

(1) 実生活に関連した課題などを通じて動機付けを行い、生徒の学びに向かう力を育成
「読むこと」「聞くこと」を通して得た知識等について、生徒自身の体験や考えなどに照らして、「話すこと」「書くこと」に結びつけることが大切である。教材をそのまま解釈するのではなく、生徒の実生活に落としこむような提示の仕方を工夫する必要がある。

(実践例)

* 関心のある事柄について、簡単な語句や表現を用いて、英文を書く機会を増やす。

自分の考え・気持ちなどを整理させ

→ 書いて伝えることに対する意欲を高め

→ 求められていることを適切に書くことを指導

* 各單元では何を目標とし、どう活用するかを意識させた授業を行う。例えば教科書本文を読み、その内容について感じたことや考えたことについて即興的に意見交換させるなど、「読むこと」と「話すこと」を統合させた活動を行う。また、学年が上がるにつれ、ペアから3～4人のグループへと活動形態を変え、ディスカッションへとつなげている学校もある。

(2) T⇔S、S⇔Sの英語使用を増やす。

教室を実際のコミュニケーションの場とする。

①授業は、英語での意味のやりとりを中心に行う。

②生徒が自分の考えや気持ちを表現できるような機会を多く設定する。

③生徒の英語による発言に対してきちんと対応する。

生徒の英語を繰り返し、しっかり教師が生徒の発言を受け止めていることを示したり、クラス全体の生徒とその発言の内容を共有したりする。

(実践例)

* 毎時間の帯学習で取り入れられている「チャットタイム」で、その日ごとのテーマについて即興的なやりとりをペアで行い、会話をする機会を習慣的に与える。また、話す活動の後には、生徒が振り返ったり、教員からフィードバックしたりする機会を設ける。

* 意見を支持する理由を言えるようにするために、まずは教師自身が授業の中で because を多くの回数使い、理由を付け加えて話すことで、生徒にモデルを見せる。

* モデルを見せた上で、生徒に即時性のある質問を行った後、“Why?”と質問し理由まで答えさせることが効果的である。

(3) 「英語を使って何ができるようになるか」

「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、4技能・5領域【聞くこと、読むこと、話すこと（やり取り）、話すこと（発表）、書くこと】に関する学習到達目標を設定し、生徒が身に付ける能力を明確化する。教員が生徒と目標を共有することにより、主体的に学習する態度・姿勢を生徒が身に付けることをねらう。

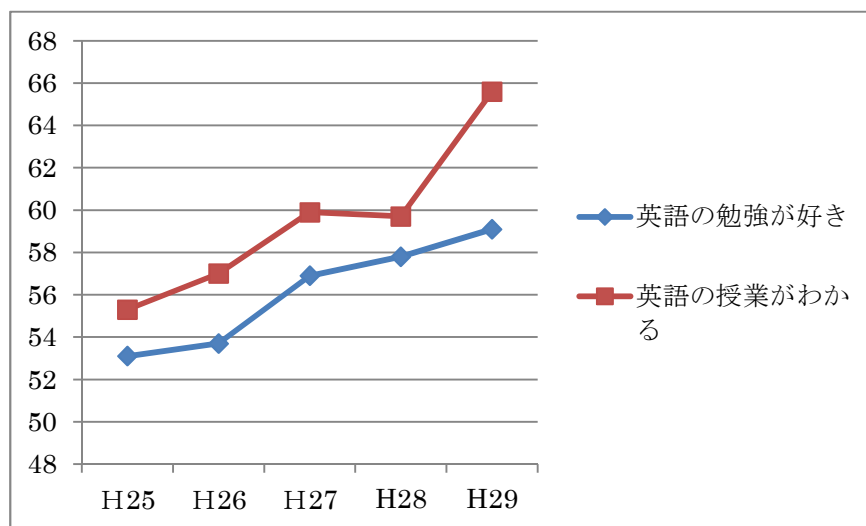
(実践例)

- * 小中高で連携し、授業見学等を月1回程度実施。单元ごとに目標・評価方法などを生徒とも共有することで、日々の学習・評価に生かす。
- * パフォーマンステストはALTが対話者で、教員が評価を行う。観点は「どれだけ話してきたか(内容)」「語彙や文法は適切か(表現)」「論理的な構成となっているか(構成)」など。その場で生徒にフィードバックをし、わかりやすい客観的な評価を実現。考えて話せるようになることを重視し、表現のみならず、話し方・構成力も育む。
- * 「話す活動」を、「即興的か」・「準備されたものか」、または「発信型か」・「双方向か」で区分し独自評価基準を作成。言語活動の目的・評価はこのリストを用いることで、同じテーマでも生徒の伸びを感じながら、継続して行っていくことができる。

「英語の勉強が好き」と答えた生徒が、5年連続で上昇

生徒自身の英語学習に向かう意欲は、言語習得に必要な「自律的学習者」としての態度・姿勢を身に付ける上で欠かせないものである。指導改善のポイントを参考にしながら、生徒を中心(student-centered)に据え、生徒の発達段階に合った「質」の良いインプット活動を行うことが大切である。受信によって心が動けば、発信したくなる。英語を使って、自分を語り、ふるさとを語る大分っ子を育成していきたい。

【参考】



						平成29年度	
	H25大分県	H26大分県	H27大分県	H28大分県	大分県	全国	
英語の勉強が好き	53.1	53.7	56.9	57.8	59.1	55.9	
英語の授業がわかる	55.3	57.0	59.9	59.7	65.6	59.9	